福清の蟻地獄

口車に乗つて榮耀榮華の夢

支那人コックと結婚

(一) 脱出した千代子語る

【北平七日發本社特電】中間地帯に於て上海へ送還された、右は蘇江省に於けるものである

支那語で「福清」――と云つただけで筆者諸君はすぐにピンとうなづかれるに違ひない、其處は餘りにも有名な日本婦人の蟻地獄なのだ、かの悪い同盟の呪はれた迷路だ、それは無智と盲愛と無力と最後迄人を信じ頼らうとする気持わ、佛教思想に陶はれたあきらめと凡そ現代女性の思潮からは絶遠い程度に置つた日本婦人の持つすべての弱点が捉へて離さぬ運命の終局点であり、文明の風を頑んで公然と白い象牙の共産鍋と反逆鍋とを跨る迷の婦人鍋である――がその福清縣から最後の力をふり絞つて脱出して來る婦人もたまにはある、福州から救はれた者はいくつとなく其陸に運ばれて官憲の暖かい手に救はれた

△▽

今年も亦一つ、彼女は明朗な六月の太陽の下で思ひもうけぬ後半生を拾つた、五月二十日に入つた北支航路長沙丸で苦力移民の群に交つて送り送られて來た若い女がそれだ、彼女の名は大山千代子さと云ふ、日蘇縣東波村出西大村蘇開郷の産れ、福州總領事館からの書類を副に陸軍港務官憲の眼にとまつて一通りの取調べをうけた彼女は二週間の秘密鍋が過してゐないとの理由で仏蘭の極度所に收容された、そして本邦の親戚で可愛さうに思つてやらうと云ふ温かい同情に迎へられて二十九日解放されると同時にその中での最初の申込者三井物産出張所主任佐藤氏の家に引き取られたのである、檢疫所での十日間、涙で泣けるだけ泣いて過去の暗い影を清算したであらう彼女は水上派出所の一隅で塗切れ塗切れの記憶を辿りつつ涙の記録を綴げてくれた

△▽

――ね、いいでせう、相手は支那人だと云つたつて男がよくて金さへありや別に人間に變りがある訳ぢやなしさ、あんたがこんな所でどんなに困いたつて先や見えてゐたよ、それよか支那人だつて立派な旦那を持つて榮耀榮華のしたいだけしてゐた方がどれだけあんたにとつてや幸かわかりやしないと云ふあんたよ、ね、それに相手の人はとつてもあんたに御熱心なんだからね、え、どんなもんだらう――ってあ……わたしまだこんな結婚なんて夢にも考へてゐませんじ……――まあこの人ったら、ねんねだやあるまいし自分の身の事も少しは考へてみるもんだよ、かうして妾か仲に立つて頼まれて來たんぢやないかね、こんな所から足を洗つて立派な御内儀さんになるんだよ、こんな甘い話なんてさう〳〵轉つてゐるもんぢやないからね、ね、よつく考へて御覽、悪い事は云やしないよ頼むからさ

△▽

大正十五年、二十一の歳の三月、長崎市浜上町の仕出屋流月に勤めるやうになつてから一ヶ月程經つた日だつた、見も知らぬ中年の女が突然訪れての話である、青白い顔さの姐さんだつた、支那人の妾をしてゐる、と云ふその姐さんが頼まれて來た男とは中川町の支那料理店コックをやつてゐる朴鎮武、歳は當時三十二だとの事、ちよつと千代子を見て感出通り民風を超越した容貌の娘に目を夜も眠はぬ程の熱愛、まる、かの女の露知らぬ恥なのだ、だから二度三度は斷つた、が、支那人妾の姐さんは九尾の狐だ、弁舌は黄河の如く或る時は春風の如くであつた

△▽

ぼつと出の田舎娘に否應云はせる隙のないのは當然だつた、それに洗ひたてると彼女の家は文字通りの貧困である、父母はとくに逝つて住むに家なく、三人の兄に一人の姉に己れ寄りの隙を求めて四方に散つたままその消息すらない、知人の傳手で流月に住み込んではみたものの寄るべき者のない身に頼白から道理はなかつた、田舎娘の無智と盲愛とほのかな憧憬を駆る恥辱とそれ等にコンデンスされた潜在性の自覚自尊心が彼女の意思を動かし始めた、九歳につけこむ悪魔の誘惑は強かつた、かくて彼女は遂に首を縦に振つたのだ（二日・日本）

福濟の獄地蟻

豪農の息子がみじめな生活

彼女の胸にも疑ひ

(二)　脱出した千代子語る

―俺は今でこそ日本でかうしてコツクなんぞやつてゐるが、支那の故郷ちや立派な若旦那なんだよ、家は豪農で何百人もの小作人が働いてゐる、人々からは尊敬されて毎日楽しく遊んで暮せる―百姓だと云つたつて邸は町にあるんだ、肥料臭い不景気なところぢやない

―その町には電車あつて？

―ブク、電車だつて？冗談ぢやないよ、電車だつて自動車だつて何んだつてあるさ、長崎なんぞと比べものにやならないよ

△▽

眼物盗りにこんな会話が繰返された、福月をやめて支那人杜夫婦になつた千代子は杜の知り合ひである日本人某の家の二階で間借りしながら始めて知る世界に生れ変つた。驚ろまる様な楽しい男の接吻の中で未知の国の女王を夢見た。貧しいながら平和な日が続いたのである、昭和二年の始め何故か男はあの坊を良ふと云ひ出してきかなかつた。見えない鎖で彼女を繋がうとする杜の深謀である事を知らう道理はなかつた。生れて八十九日目だと云ふあの坊は武蔵と名付けられて夫婦生活の紐帯を破ると共に彼女を異国なる母へ飛翔させた杜は間もなくコツクを雇めた。その年の暮れには杜に伴はれて母子二人は知り合ひの支那人料理店を頼つて遠く仙臺へ旅立つた。東北の冬の風は南国生れの彼女の身体に滲みた。そしてそれが即ち彼女自身の運命の暗示であることには気付かなかつた。ここから千代子受難の本舞臺は幕を開く

△▽

仙臺で杜は料子になり、また小さな商売もやつた、が吹きまくる不況の風は一家に暗雲を呼へてくれなかつた、武蔵は曲りなりにも大きくなつて行つた、と同時にそれに反比例して母たる彼女は益々窮して行つた。書けば限りない忍苦の生活である。昭和五年には暗雲を求めて三人の夫婦は前後して東京へ足を踏み入れた。然し大東京の屋根の下に暮く筋道には暗雲のカケラさへ無かつてはゐない、友人から誘惑へ、親戚から街路へ、哀れな母子は自分の国でありながら窮屈な異邦人の後をおつて野良犬の如く歩まねばならなかつた

△▽

その頃から杜の表情には日毎変化の度を加へて行つた。たとへ他国でなりとは云へ支那紳士の若旦那の生活にしては餘りにも怪しめなものではなからうか、餘りにも多ない女王の夢ではなかつたか、うすぼんやりした疑ひと不安が彼女の胸で明滅した。彼女は働く迄も男を信じてゐたかつたのだ。昭和六年の半ば迄三人は跡形となく東京と仙臺の間に国を変へた。そして最後にかなり生活戦線に於ける銃火の試練を経た彼女は一大覚悟を定めて愛する二人の者の前に唯獨り敵給大東京の暗黒国内へ帰り込んだ。無智なるが故に純情であつた彼女は踏みくちやにされつつ暗黒の側に大きな甲斐を感じてゐた。窮まる間もない彼女の上にも日は遂に来なく流れた

[illegible]

[illegible]

だつたか、[illegible]ばらせる彼女はまことに可憐な蕾に過ぎないのであつた

―本国へ御帰りの節はきつと知らせて下さい、お供しますから貧しい財嚢は[illegible]桜かの武蔵の暗雲に覆かれて手紙と共に届けられた。十月、十一月、[illegible]子を[illegible]来行[illegible]曲も彼女には「春ひらく」前奏曲ともきかれた事であらう。年は明けた。が孫望の春は果して来たか！

△▽

杜からは一緒の便りさへない。不安、恐ろしい不安、ああ、そして[illegible]の不安は遂に姿を現はした。杜はその時すでに本国へ帰つてゐた後であつたとは。武蔵を連れた杜が多くの同胞人に交つて暮れ行く十一月始出しの船を乗いたのはずつと目を詰てからの事。[illegible]

そもそも[illegible]

[illegible]

福清の嶽地獄

夫の跡を追ひ福清に行けば

たゞ泣くばかり

(三) 脱出した千代子語る

性の醜悪を知つた彼女は、恐怖のどん底に身も世もない絶望感の日夜を過ごした。脅かされた子を、氣力をい、絶望を、責任を、すべてを奪ひ去られたと思つた。生くる希望を失つたと思つた。が、然し一切を清算して新しく生きるには彼女は餘りにも心弱かつた。そしてまた女王の生活への執著は強かつた。彼女は愛情の絶縁に泣き崩れた。彼女は筑時杜の従兄に當ると云ふ男の許に身を寄せてゐた。その男はチャルメラを吹いて支那蕎麦を売り歩いてゐたが、彼女にとつては杖とも柱とも頼まねばならぬ唯一の慰藉りの人間であつた。

△▽

—千代子さん泣いても駄目。あの男盛つたのは仕方ない。あなたも後から行つたらいい。金はわたしつくる。

—金を貸していただいても私には返すあてもありませんから。

—金貸す、無い、仕方ない。ある時返すいい。利ずいらない。

暫月か隔々の日を過つた後遂に堪へ得られなくなつてその男に相談した時、彼女の得た返事は右の様なものだつた。ほんとうの親切かそれとも何か企みあつての事かそんな事は考へる場合ではなかつた。飛び立つ思ひ、唯それだけの形容詞に盡きる喜びであつた。

△▽

矢張り棄てられたのではなかつたのだ、杜は強烈な時局にせき立てられて急ぎ帰つたのであらう、一時でも悩んですまなかつた、さう彼女は考へた。杜には『日本を發つ』との電報を打つてやつた。同郷の男に伴れられて東京へ、そして上海行貨船の客となつた。

さかり行く日本の山はほころびそめた春に霞んでゐた。祖國日本よ！が彼女は過ぎしさ以上の憂はしさを其處に捨てて來たのだ。杜の故郷へ！武運の待つ國へ？あこがれたお伽噺の世界へ！船は一路明暗霧曲の波を蹴つて進んだ。

△▽

四月九日の朝まだき霧に煙つた福州から小さな發動機船に乗り換へて更に五、六時間。フクチャンと呼ばれた小さな町の波止場についた二人は機関銃出迎へに來た杜と共に田舎路に歩を運んだ。

——杜さん！

久し振りに見る杜の姿に物も言へずに唯涙だけがこみ上げて來た。

——杜さん！

——ウン

ただそれだけの挨拶である。彼女を捨て互ひに黙々の事を考へながらただ黙々と白い路を歩いた。

△▽

彼女の抱いて來た期待は路の遠さと共に次第に崩されて行つた。杜は、何故よく來たと抱いてはくれぬ。何故あれ程恐しかつた武運を連れて來てはくれぬ、何故こんな路を歩かねばならぬ、行けども行けども町の愛は見えず電車の軌りは現れて來なかつた。そして不安のままに二里半——

—さあ此處だ。俺の家だ入れと或る部落に近づいた時、此処を過つた杜の冷たい言葉はどれだけ彼女に死の様な疲労と感情を覚えさせた事だらうか。

—えゝク

眼を閉つてみる、見慣はす、けれど電車は自動車は電燈は影さへない。暗い片田舎の一部落が陰く冷然と彼女を嘲笑つてゐるだけである。あざむかれた！頼りが思切られた口惜しさが、明暗に変がつて、眼窩い寂りぼつちの日本女の姿見る得るものは、硬、たゞ硬、そしてそのままじめ／＼した土間に泣き倒れたのだが……

△▽

自分の愚かしさ故に、愚し過ぎた結果故に、一切を諦めてそれから、の彼女は田舎の支那女としての生活に順應せねばならなかつた。反抗せんとしてなし得ざる涙の中の

武運は久しく見ないうちに見違へる程大きくなつてゐた。もうヒクだもの。逢つてやつた時者も今は仇一可愛ない身にまつはるものは無情の支那服だつた。彼女も日本人としての過去を捨てる為に日本服を脱いだ。今更の如くなつかしまれる著物に思ひ出のすべてを籠めて眺へられた支那服を著た。ふと船出する時何の氣もなく見送つて來た日本の山の春景色が頭の一隅にフラッシュ・バックしたが……彼女はそのまま野良に泣き立てられて行つたのだ。日日

島だ。再び石にひしがれた女としての生活が始まるのだ。電車のある町、電燈のある町が泥と肥料と豚の臭氣にみちた農村に変り、何百人もの小作人を顎の先で使ひながら侍女を侮へ遊びまはる王侯の臭氣機がかき消されてしまつた後に見る彼女の姿は餘りにも哀れなものであつた。土と行と惑で建てた家、と云ふよりは部落小屋に近い住居に杜一人が住んでゐた。

△▽

福清の蟻地獄

少く見積つて白い奴隷二百

耐へ切れぬ虐待

(四) 脱出した千代子語る

彼女の愛はそれだけでは満きなかつた、それは唯一人の夫と思ひ定めた杜に情婦のある事だつた

嫉妬しらしく見せた杜の従兄も結局は同じ穴の狸にしか過ぎない事を知るには日を要しなかつた

—おい起きろ、眠くんだ

夜の明けきらぬうちから、彼女には重い眠や疲が待つてゐた、一日を休む間もなく働いてヘトヘトになつて帰るとそのまま泥の如しいぎたなく眠つてしまふのだ、唯眠だけが唯一つ与へられる最大の慰安であつた、食事はきまつて三度と云ふ訳にはゆかなかつた、肉も魚や野菜、いやそれさへ鼠走であつた、我や豚にやる屑も滅度かロにするうちには腐れた

△ ▽

それは内閣にゐる時分からではあつたが杜は彼女に阿片の味覚を教ゆた、勿論無尽な々取、として彼女をつくり上げる為である、その間には鼠々と情婦が出入りした、彼女の眼の前で平気で情交をつくした、時と

て我を忘れて情婦へ武者振りつく事はあつたが—けれど杜の中毒なロと動物的な眼とがそれを阻んだ

—馬鹿、何をする、俺の女に手向ひすると承知しねえぞ、畜生で遠慮しくはどうやらあがたくなり、と首を絞つすられてゐる

侮れると

—どうまあ口ろ

男女の愛慾はこんな時でも、也

くにも似ぬ、小便を飲ませられた事もある、足極をつけ鞭がされた事もある、毎晩、用食、睡眠、海岸の休日が過いて彼女の胸には牛馬の絶へ間がなかつた、もう人間ではなくなつた、牛である、馬である、杜の動物的な慰安、性慾の玩具であり慰撫りあげるロボットである、武蔵かいや名も支那式に徹底と嘘へられた子供のみが一切きりの支那服の中でどうやら大きくなつて行つた、生きる力をこれに賭けた

△ ▽

彼女の眼差にも、[illegible]

敵だ[illegible]

彼女の眼差にも、[illegible]

と見えて彼をもつて彼を制する運命の運用で今では五、六萬の金もためて質屋を開業し、そのかみ自分を制御した支那人男を番頭に使つてゐるとか、その女がまの唯一人の保護を受けた人間である、どの女もどの女も甘い支那人の口車にのつて来た

△ ▽

—ケンチウいるか

とのこつとのぞかせた純重な支那人の顔を何にも覚悟のある彼に見た用心の眼は

—わたし商売人、金いらない

これあげる

と[illegible]

た天婦羅の金指輪やイミテーションの真珠の首飾りに眩惑されて次第に御眼の鏡に身動きも出来なくされてしまふ、そして人知れず連れ出された女もある、中には部屋から部屋を転密された女もある、顔は見ないかどう少く見積つても二百人は下るまい、さうした話をそれとなく聞き知つた

△ ▽

[illegible]

田中刑事部長

相馬刑の検挙である

福清の地獄

不思議な神の惠み

脱出に漸く成功

耐へ切れぬ虐待

(五)　脱出した千代子語る

[illegible]出村[illegible]彼女は[illegible]に其處へ[illegible]ちたのだ、山は二百尺位の[illegible]られた[illegible]の女も知らぬ[illegible]に何時も平[illegible]に明け暮れた。[illegible]い[illegible]浄ひ[illegible]田[illegible]に[illegible]陽[illegible]は[illegible]た。…そして去勢された彼女[illegible]は死への路を歩いた。その間にも支那人男は何[illegible]もなく[illegible]をして反物を、貴金[illegible]や[illegible]に[illegible]女[illegible]品を仕入るべく日本へ出[illegible]た。男[illegible]と[illegible]の日が相[illegible]らず彼女の上に[illegible]た。[illegible]とも[illegible]は許されぬ、逃出は許されぬ、必[illegible]以外にあの云ふ[illegible]は許されぬ、一寸村はづれの路でも歩いてるやうものなら

―姐さん！

と云ふ聲が呼びかける。ここの男部は日本語の中で「姐さん！」と云ふ言葉を一番しっかりと發音する、女と見れば誰でも「姐さん」だ、「姐さん」と日本女の代名詞だと心得てるのでせう

△　▽

！姐さん！何處へ行くか？

蛇の様に執[illegible]い眼で、[illegible]をうかべた不氣味な唇で、おつと金縛りにして了ふのだ。でも彼女は隣家にゐる日本女とだけは自由に話が出來た。その女は彼女の[illegible]にある唯一人の日本人女だ。隣家の女位とならと云ふ[illegible]大さだつたか、それとも長年打ちひしがれて氣力を失つたその女となら何も仕出かす心配はないと云ふ心算であつたかは知るところではないが。その女は[illegible]の生れで名はサキエとのみ語つた、年は二十八になつたと云ふ、サキエさんはよく[illegible]つてきかせた

もう六年になる、はじめは男の父は[illegible]つてゐたが今は死んでしまつた、[illegible]に[illegible]ない、子供は三人[illegible]生れたがみな死んでしまつた、[illegible]に[illegible]へきれずなつて何度死を選んだかしれない、子供を背負つて海に飛び込んだがいつも發見されて引き揚げられた、男は情婦をひき込んで公然同居してゐる、死ぬ事さへ叶はぬ自分だ、唯漠然と生きて行くだけだ

△　▽

日本はどの方角になるだらう、今頃はどんな氣候だらう、二人はあかず思ひ出を語り合つた。サキエさんの力のない眼も日本の話を語す時だけはわづかながら輝いた。

日本！[illegible]はしさを捨てて來たつもりの日本だつたが！もうその日本には帰れないのだらうか。

△　▽

日本と云へば大きな方だ、小さな[illegible]迄でが日本を思しがつてゐるのではないか、村はさ[illegible]に[illegible]迄には[illegible]なりンチた加へなかつたが、どうしても小さな日本人になつかなかつたただ「父」と呼ぶだけであつた、[illegible]の子は逃げに來ない、勿論こちらからも逃げに行かぬ、[illegible]りぼつちで淋しさうに門口に佇んでゐる事が多かつた、小さな日本人に支那人の[illegible]を「日本仇」と呼んだ、時として父にまで「日本仇」を浴びせかけた眼々として流れる日本人の血はどうする事も出來ないのだ、彼はただ唯一人に頼つた、彼女は[illegible]一人にすべての望をかけた、母子はうづくまつたまま抱きあつて一夕になつた、彼は何の罪に日本から支那へ來たのか知らなかつた、父が何の罪に母をうつのか知らなかつた、彼は次第に反逆兒に育てられて行つた、小さな拳を振りあげて反抗した

―俺は日本人だぞ

と叫ぶ

―おッ母さんをいじめる奴は來い？

と[illegible]ん、彼が[illegible]りで遊んでゐる時、彼女が[illegible]に[illegible]つて行くと彼の眼は[illegible]ッ[illegible]母の[illegible]に食ひ入つて來た

―[illegible]

[illegible]ないの？

―日本へ？……

日本に[illegible]らうよ、ねえ

そこで思はずあらん限りの愛情を籠めて抱きしめるのだ

△　▽

秋が、冬がとく過ぎてはや昭和七年も暮れた、よく[illegible]た、かれこれ一年もの間只管に死への行進を続けて來たのだ

―どうにかして逃かれたい

白い奴隷は一度は必ずさう思ふ、[illegible]行する、さらしてきまつて[illegible]駅に引ッ[illegible]かるかる追ッ手の手に捕へられる、成功した例は數へる程しかない、それは[illegible]まで逃れて來た女の[illegible]が[illegible]州の官憲が手をつくしても救ひ出せない事例がよく物語つてゐる、彼女等は一度三度で捕まる、彼女も亦その例に漏れなかつた、二度目に[illegible]捕へられた、けれど彼女にはそれ[illegible]悪みがあつたのだらうか、遂に[illegible]出[illegible]

福清の蟻地獄

十字架を背負ふ荊棘の路は終る

忘れ得ぬ子供！

(終) 脱出した千代子語る

彼女は微笑だけはどうしても逃れて遁げたいと思つた。微塵のない生涯は思ふだけでも淋しかつた。けれど死を賭しての脱出に子供を連れるのは成功を望まぬ者と同じである。そこで彼女は微塵の涙は

△

邦の四月十四日(五月八日)朝、朝食後から伯母との相談に閉れて私は死んだ様に眠つてゐた、今こそチャンスだ、月本から著て來た思ひ出の著物を著た、その上へ思に

▽

支那服を被つた、風呂敷の思へのカモフラージである、風呂敷包を持つた、裏戸には鍵を卸した、何も知らずやう〜と眠る微塵へ一枚と腕時計を風呂敷包にした。そして遂にその日は來た

左様なら、お母さんを恨まないで……

低聞して去り際に足を無理に思ロへ運んだ、思へる手で戸に縋り戸を開いた、思に戸外から鍵をかけたこれでいい、これでいい、所詮逃れる術のないものと觀念してゐるのにかくもすら〜と思が運ばうとは、思を試ふ間もなく彼女は野路の闇を駆け抜けした、夜明けには未だ早い、大氣が冷々と肉に沁る、山の端の殘月はやがての翳明を物語るげに淡く霞んでゐる木の思の風ぎ、小川のせせらぎも心なしか何時になく耳を打つ、思度となくふり返つた、苦思の家は遠く一隅毛の思に消えかかつてゐる、追手は來ない、彼女、やがて部落の端を過ぎた、未だ氣付かれぬ様である、次の部落も、そのまた次も長いしじまの裡に熟睡してゐるそしてたうとう二里半の道をフーチャン迄來た

▽

夜はすつかり明け離れた、九時迄來れば一安心である、彼女はフーチャンの町で知り合ひの日本人姉さんを訪ねた、彼女は姉さんである、これが最後だと思ふと知らず知らずに思涙が湧くなつた、せめてもの名残に風呂敷包から著物をとり出した、後で困る邪はわかつてゐるが

△

▽

—これわたしいらないんで……

さうせねばならぬ彼女だつた、それが片身になるのだ、あかぬ別れだ！でも時は寸秒も留まれぬ、腕時計をこつそりと金に替へて旅費とした、後は唯命に縋るだけだ、きはめて平穏を祈つて——脱出の日本姉さんと氣付かれてはならぬ間に發つた、船は出た、成功した！成功した！ごちやく〜した感情がカクテルとなつて胸中に渦巻く、この船はかつては王侯の生活を夢見て、今は思となつた杜の妻を乗せてフーチャン迄運ばれた船ではないかしたとへ様のない氣持だ、そして淋もなく遂けて遂けて仕方がなかつた、大きな塊がぐんと咽喉につまつた

▽

船中—船室事務—基隆—位り—にゐる思まぐるしい變遷の裡に彼女は完全に消えれた、始めて心から嬉しかつた、久し振りに天日を仰いだ、救はれた！彼女は今三井物産出張所主任佐士殿氏の家庭に女中として働いてゐる、十字架を背負つて長い荊棘の路を歩かされた彼女にとつてこれからの生活が拾ひものでなくてなんであらう、が彼女には未だ忘れ得ないものが殘つてゐる

—色々御世話になつた日本姉さんの事を考へると氣の毒です、サキエさんはどうしてゐるでせう、フーチャンの町の姉さんに手紙をあげたいのですが……

それから微塵の事だけは死んでも忘れられません、過ぎる時もいつたらず連れて行きたいと思つたのですが、今年八才になります、お母さん日本に帰つて學校にはいりたいと日頃の様に云つてゐましたのに、思ひ出の品だけでも持つて來られた程……

▽

水上警出所の一時の記者と相對してゐる時、彼女はかう云つて

△

物語は終つた、が記者にも同じ様な悲哀が感ぜられてゐる、これからの彼女は何處へ行く？サキエさんは、フーチャンの町の日本姉さんは、一百有餘の白い女達は果してどうなら？殺された微塵は如何に育てられるだらうかなどと今後まだどれだけの日本女が同じ路を歩くだらうかなどこれ等は問題東京式にかかれた大きな問題だ、と無責任に片付けてしまふ事にはゆかない、と目頭を強で押さへた

……でこれから一體どうする介錯りですか？

無遠慮に記者が問ひかけると

—どんな方でも使つてやらうと云ふ方があれば働いてたとへ著物の一枚でもこしらへてから内地へ帰りたいと思つてゐます、別にあてはありませんが……

と答へてじつとうなだれた

△

▽

無遠慮に記者が問ひかけると

暗い過去を悔い故郷に歸るを厭ふ

福州の蟻地獄から基隆に逃れ來た大山千代子

【基隆電話】支那福建省福州の悪くだに恐ろしい日本婦女誘拐から五月二十日入港の福州長沙丸で身を以て

基隆に逃れて來た長崎縣西彼杵郡小榊村大山千代子さもの寄しき半生はかつて本紙に報道された通りであるが其の後福州會社より彼女の本籍地たる小榊村長に宛て船運賃徴收方の照會を行つた結果呼び彼女は水上派出所に呼び出されて新しい涙を絞らねばならぬ事となつた、基隆に逃れ來て

早や二ヶ月有餘、當初の三井物産出張所主任佐土原氏宅に引取られて今迄の數多くの女中が來へ切れなかつた苦難によく打克つて後半生の幸かしき和樂を求めて一路邁進を續けつつあつた彼女が去る廿二日思ひがけずも突然水上派出所への呼び出しをうけたので驚いて駆けつけた彼女が聞かされた言葉は

商船からの照會をうけた小榊村長が早速千代子の戸主と思はれる村内の大山仙次郎を呼び出してただした所彼仙次郎が語るには自分には三人の妹があつて行方しれぬのはマセと云ふ本年三十一歳になるのがあるだけで千代子と云ふのは知らぬ、けれど色々噂をきいて見るとどうやら千代子と云ふのはマセの事らしいからもう一度新しい涙を絞べて貰きたい、そしてもしその

千代子がマセであつたならどうか郷里にかへる様斡旋して下さい。及ばずながら兄としての義務をつくしたいから……との事、そこで小榊村長から當方へ照會狀が來た様な訳だがお前はほんとうはマセと云ふのではないか若さうならば郷里へ歸つたらどうだ！と大喝一喝されて泣き出した、仙次郎！それは確かに兄だ、またさう云へば

幼い時マセと呼ばれた記憶も微に残つてゐる、生年月日や何時から千代子と呼び慣らされたか、そんな事はおぼえてはゐないが、悪しい兄嫁の居所がわかつた、十數年ぶりに長崎の土が踏める、大きな喜びだ、けれど彼女にはその喜びを躊躇する理由がある。「暗い過去を持つてどうして郷里に歸れよう、そしてまた支那へ戻したあの武男を取り戻さねば、さうだ、そして彼女は涙の顔を擡げて快然云ひ切つた。「義理ありません」

何時迄も此處にゐます、佐土原氏は近く東京の本社へ轉勤の事、彼女は陸の姉に對はらとあかず思ひ出の一路の道を歩まんとする彼女の姿